

西福寺

〔藤森のひがし大亀谷升屋町にあり。如意山光嚴院と号す、浄土宗にして智恩院に属す。本尊阿弥陀仏は聖

徳太子の御作、長三尺五寸。いにしへは禪刹にして持戒の地なり、中興教誉上人慶長八年東照宮より境地を拜領して草創ありしなり〕

釈迦堂 〔堂前ひがしの方宝蔵に安置す。天竺目蓮尊者の作にて、閻浮檀金の尊像なり。○当寺の記に曰、人皇九十六代の帝光嚴院仙居ありし所なり。御製あり、

玉くしげあけてしみれば今朝よりも身にも袖にも涙落して 光 嚴 院

太平記曰 光嚴院禪定は、伏見の奥光嚴院と聞し幽閑の地に住せ給ひけると。云々。〕

即成就院

〔藤森の東を北に至る三町許にあり、大亀谷北寺町といふ。律宗にして泉涌寺の内法安寺の兼帯所なり。

いにしへは伏見寺と号して、今の江戸町の旧名即成院村にあり。寛治年中正四位修理大夫俊綱の建立なり、則俊綱朝臣の石塔あり。白川院の皇女宜陽門院先帝の御菩提のため、下野国那須庄を当寺に寄付し給ふ、文録二年伏見城を築給ふ時此地にうつす〕

隆閑寺

〔大亀谷のひがし、宇治道の南にあり。妙亀山と号す。法華宗にして、開基は洛の本能寺日達上人なり。法

華勝劣派の学室とす〕

八科峠

〔仏国寺のほとりなり、土人八島峠といふ。名義詳ならず〕

木幡関守屋敷

〔六地藏の西北の山上にあり、今字となす、是いにしへの街道なり。秀吉公伏見城を構給ふに、木

幡の関路城外の良に中て往還の輩城中を見下す、故に今の路を關き給ふなり〕

千首

春ははや木幡の関の朝ぼらけ都のたつみや、かすみぬる

為

尹

等泉寺

〔大亀谷敦賀町にあり。本尊阿弥陀仏は恵心僧都の作にして、長八尺余の坐像なり。開基は等超禪師、中興

は円西十徳、今女僧是を守る〕

天王山

〔同所仏国寺の山号なり。則ち此山を天王山と号する事は、開基高泉和尚、はじめ黄檗国師に従ふて住山の

時、此辺を徘徊せらるゝに、小藪の中に年ふりたる仏面を拾ひ給へり。これをとり帰つて弟子を招きて、そのほとりを
見せしむるに、支体こ、かしこに散在す、これを採帰てあつめ合するに全体を得たり。其時仏師を呼んでこれを見せし

むるに、毘沙門天びしゃもんてんにして弘法大師こうぼうだいしの作なりといふ。即ちかれに命じて修造莊嚴せしむ。其折から西国方の武士登山して此由を聞、その施主となりぬ。それより程なくして公務より当山を免許ありて、高泉開基し給ひぬ。此像を得給ふ事は当山開闢の前表なりとて、世の人奇なる事を感じぬはなかりけり、故に堂に安置し山号となす。いにしへ永光寺といふあり。延宝年中再建ありて、後水尾院ごみづのおのゐん勅して仏殿だいにんかくに大円覚だいゑんかくの号を賜ふ。是即ち林丘寺宮の御奏達とぞ聞し。勅筆今文庫に収む。高泉和尚かうせんは黄檗山いんげんせん隠元いんげんぜん禪師の附弟にして、大明国の人黄檗山に住して第五世なり、元禄八年十月十六日入寂す、仏国寺の由縁は前編に見へたり、故にこゝに略す」

木幡金辻こはたかねがつじ

〔六地藏町ろくぢぢょうより宇治うぢに至る札の辻なり。六地藏といふは後世の異名にして、みな木幡里こはたのさとなり。木幡の関こはたのせきに関守屋敷旧跡、六地藏、大善寺だいぜんじの西北の山上にあり、今関山といふ、又木幡峠ともいふ〕

平治物語曰 明十日の朝、右衛門尉せうなりかけ行景といふ侍士をめして、都の方に何事かある見て帰れとてさしつかはず。業景馬に打騎てはせ行程に、木幡峠にて信西入道の舍人とねり竹澤たけざはといふ者、御所に火かけて後禅門なち奈良ならへと聞へしかば、此事申さんとてはしりけるに行あふ。(下略)